



# 日本植物病理学会ニュース 第56号

(2011年11月)

## 【学会活動状況】

### 1. 部会開催報告

#### (1) 関東部会

平成23年度日本植物病理学会関東部会は9月15日(木)、16日(金)の2日間にわたり、文部科学省研究交流センター国際会議場(茨城県つくば市)で開催された。参加者数は名誉・永年会員7名、一般会員137名、学生会員59名の計203名であった。講演題数は39題で、その内訳はウイルス病関係5題、細菌病関係5題、菌類病関係18題、病害抵抗性関係7題、病害防除関係4題で、活発な質疑応答が行われた。今年度は特別講演2題を企画し、1題は法政大学の西尾 健先生を座長として、平成23年度日本植物病理学会学術奨励賞を受賞された山次康幸先生(東京大学大学院)による「タバコモザイクウイルスの複製・移行に関わるポジティブレギュレーター」、もう1題は野菜茶業研究所の畔上耕児先生を座長として、同学会賞を受賞された對馬誠也先生(農業環境技術研究所)による「イネもみ枯細菌病の生態と防除に関する研究」の各演題で講演をいただいた。両先生の優れた研究成果について紹介していただき、大変好評であった。

開催初日の昼の休息時間に役員会が開催され、議題1「学会事務局からの報告事項：①平成24～25年度評議員選挙、②科研費分科・細目の大幅改定」、議題2「関東部会会則及び関東部会役員選出細則の制定」、議題3「平成24～25年度関東部会部会長の選出」、について話し合いが行われた。関東部会会則及び関東部会役員選出細則については協議の結果、一部修正を加えて承認された(平成23年9月15日より施行)。関東部会部会長については協議の結果、法政大学の西尾 健先生が選出された。初日夕刻には隣接するつくば国際会議場内のエスポワールで懇親会(参加者：78名)が開催され、研究の情報交換等を通して大いに親睦が深められた。

最後に部会開催あたり御協力いただいた座長、会員諸氏に感謝申し上げます。(阿久津克己)

#### (2) 関西部会

平成23年度関西部会は10月1日、2日の2日間にわたり高松市サンポートホール高松にて開催され、参加者は237名であった。今年度の講演は全て口頭発表で行われ、総講演数は97題で、内訳は感染生理44題、糸状菌10題、細菌6題、ウイルス6題、植物保護31題であった。開催地委員長の秋光和也氏(香川大)、幹事の五味剣二氏(香川大)および実行委員を中心に、関係各氏のご努力により円滑な部会運営のもと、3会場に於いて熱心な討議が行われた。1日の講演終了後、全日空ホテルクレメント高松にて懇親会が行われ、香川大学農学部部長や香川県農政水産部長からの来賓挨拶、大木 理次期部会長(大阪府大)による乾杯の後、150名の参加者一同香川県のグルメに舌鼓を打ちながら相互の親睦を深めることができた。部会役員会は1日午前中にサンポートホール高松内の会議室で開催され、木原淳一事務幹事の進行で、役員交代、庶務・会計報告、次年度の開催計画等が審議・了承された。また、平成24年度の部会は、開催地委員長尾谷 浩氏(鳥取大)、幹事児玉基一朗氏(鳥取大)により、鳥取県で開催される旨が了承された。これらの審議・了承事項は、同日午後の部会総会においても報告され、了承された。総会終了後には、荒瀬 栄氏(鳥根大)による部会長講演「光と植物病害」があった。(荒瀬 栄)

## 【関連学会報告】

### 植物保護科学連合の設立と公開シンポジウムの開催

日本植物保護科学連合(Union of Japanese Societies for Plant Protection Sciences)が、平成23年7月15日に設立されました。本連合の目的は、植物保護科学および関連学問分野の研究および教育を推進し、我が国におけるこの分野の発展と社会的普及に寄与することです。現在、日本植物病理学会、日本応用動物昆虫学会、日本農薬学会、日本雑草学会、植物化学調節学会の5学会が加盟しています。

連合設立の経緯は次の通りです。平成21年6月、上記

5学会の会員及び日本学術会議連携会員が集まって第1回「植物防疫(後に植物保護)シンポジウム準備委員会(仮称)」を開催し、国際的に食料問題が増大する中で植物保護に関連する学会の連携を図ることが話し合われました。平成22年7月の第6回委員会は「植物保護科学連合(仮称)準備委員会(仮称)」として開催され、それまでの準備委員会を新たな検討組織として「運営委員会」に組替えることになりました。平成22年12月に、植物保護科学連合準備委員会兼第1回運営委員会(委員長:松本宏氏,筑波大学)が開催されました。各学会で連合への参画と連合規約が承認され、7月15日の第4回運営委員会で連合の設立が決まりました。

連合設立日の午後、日本学術会議農学委員会植物保護科学分科会と連合の共催で、公開シンポジウム「食料生産から生物多様性を考える」が開催されました。会場は、東日本大震災による節電対策の影響が懸念されたことから名古屋大学にお世話頂き、野依記念学術交流館でした。まず日本学術会議植物保護科学分科会委員長上野氏夫氏の開会挨拶「植物保護科学推進に向けて」、続いて次の6題の講演がありました。門脇辰彦氏(名古屋大学)の特別講演「世界におけるミツバチの現状と減少の原因」、夏秋啓子氏(日本学術会議連携会員,東京農業大学)の「途上国農業から見た生物多様性と私達の食卓」、大野和朗氏(宮崎大学)の「農家のための生物多様性～環境保全型害虫管理技術の展開」、富永達氏(京都大学)の「作物の栽培と雑草の多様性」、米山弘一氏(宇都宮大学)の「根寄生雑草と食料生産—ストリゴラクトンから見た生物の機能多様性とその農業利用—」、片木敏行氏(住友化学(株))の「欧米における農薬の生態影響評価・最前線」です。総合討論は白石友紀氏(日本学術会議連携会員,岡山大学)の進行で行われました。シンポジウムの詳細は、松本宏委員長が日本農薬学会誌36(4)に報告されるので割愛しますが、156名の参加者があり盛況で活発な質疑応答がなされました。

(畔上耕児)

#### 【関連国際会議開催状況】

#### 2011年度アメリカ植物病理学会大会および第17回国際植物保護会議合同会議報告

国際植物保護会議(IPPC)は、第1回が1946年にベルギーで開催され、その後概ね4年毎に開催されてきた。今回は、アメリカ植物病理学会大会との共同開催で、8月6日～10日の5日間に亘ってハワイ州ホノルルのコンベンションセンターで開催された。総会や表彰式は、両会議が独立で行ったものの、講演やポスター発表、懇親会は一体

で、概ねアメリカ植物病理学会(APS)によって運営された。登録者(有料)は約1600名、その他約350名が招待参加であった。参加者は約50か国、とりわけ中国から150名超が参加しているのが印象的であった。日本からの参加者は約60名であった。学会のHPは<http://www.apsnet.org/meetings/meetingarchives/2011annual/Pages/default.aspx>におかれ、プログラム等を見る事ができる。

会議では、口頭による4題の基調講演、35のスペシャルセッション、15のテクニカルセッションが行われた。IPPCとの共同開催であるため、昆虫、雑草や化学農薬関連のセッションも複数行われた。当初は本会議の直前に京都で開催される予定であったInternational Congress on Molecular Plant-Microbe Interaction(東日本大震災の影響で2012年8月に延期)で発表を予定されていた方が多かったためか、植物-病原の相互作用や分子生物学に関する発表は、例年の米国植物病理学会大会に比べて少なく、病害の識別・検診や病害の生物防除・総合的防除に係わる発表が多かった。国際植物保護会議の母体である国際植物保護科学会(IAPPS)には、日本植物病理学会、日本農薬学会、日本応用動物昆虫学会、日本雑草学会が参加している。IAPPSの東アジア地域センター(EARC)理事の梅津憲治氏、前理事の山本出氏、事務局長の上山功氏のご尽力により、各学会から推薦された4名およびEARCから推薦された日・中・韓の研究者3名による7題の講演を含むスペシャルセッション「Innovative Chemical and Biological Approaches to Plant Protection」が9日に80名程度の聴衆を迎えて行われ、質疑も活発であった。

ポスター発表には1000余題の登録があり、うち910題程度が実際に掲示されていた。既述の理由によるものと考えられるが、植物-病原の相互作用や分子生物学に関する発表が、例年の米国植物病理学会大会に比べて少なく、病害の識別・検診および病害の総合的防除に係わる発表が多かったのが印象的であった。病害の識別・検診分野(80題余り)では、トマト地上部の細菌病害のマルチプレックスPCRによる簡易診断に係わるポスター発表が、優秀発表賞を受賞した。総合的防除に係わるポスター(250題余り)の中には、生物的防除に係わる研究発表だけでなく、化学的防除(農薬開発)に係わる発表も30題程度含まれていた。この他、植物病原菌と植物ウイルスの分類・進化等に係わるポスターがそれぞれ30題程度、新病害や問題となりつつある病害に関する発表が30題強、病害の発生生態に係わる発表が40題程度、病原の系統解析に係わるポスターが30題程度、感染生理に係わるポスターが200題弱であった。ポスター掲示は夜10時頃まで延長され、多くの参加

者が遅く迄ポスター発表を見ていた。

発表内容とは直接関係ないが、今回の大会ではスマートフォン用アプリが提供され、プログラムや要旨がすべてスマートフォン上で閲覧、クリックによって聴きたいプレゼンテーションのスケジュール管理を容易に構築できるようになっていたのは大変便利であった。さらに、発表者が了承したセッションについては、パワーポイントファイルとともに講演および質疑応答の全体が記録され、有料ではあるが後日公開 (<http://www.apsnet.org/MEETINGS/MEETINGARCHIVES/2011ANNUAL/OVERVIEW/Pages/MeetingRecording.aspx>) されていて、閲覧およびオーディオファイルのダウンロードが可能になっている。このような新たな会議運営の試みは植物病理学関係では初めてで、興味深かった。(有江 力)

#### 【病害虫研究会等開催予定】

##### (1) 第 65 回北日本病害虫研究発表会

日 時：平成 24 年 2 月 16 日 (木) -17 日 (金)

場 所：岩手県民会館 (盛岡市)

(〒 020-0023 岩手県盛岡市内丸 13 番 1 号)

Tel: 019-624-1171 Fax: 019-625-3595

連絡先：岩手県農業研究センター 環境部 病理昆虫研究室

Tel: 0197-68-4424 Fax: 0197-71-1085

##### (2) 第 59 回 関東東山病害虫研究会研究発表会

日 時：平成 24 年 3 月 2 日 (金)

場 所：栃木県総合文化センター (宇都宮市)

(〒 320-8530 栃木県宇都宮市本町 1-8)

Tel: 028-643-1000

連絡先：栃木県農業試験場 環境技術部 病理昆虫研究室

小山田浩一 oyamadak01@pref.tochigi.lg.jp

(〒 320-0002 栃木県宇都宮市瓦谷町 1080)

Tel: 028-665-1241

詳 細：関東東山病害虫研究会 HP をご覧下さい。

##### (3) 第 64 回北陸病害虫研究会

未定

##### (4) 第 94 回関西病虫害研究会大会

日 時：平成 24 年 5 月 24 日 (木)

場 所：和歌山ビック愛 (和歌山市)

(〒 640-8319 和歌山市手平 2 丁目 1-2)

TEL: 073-435-5200 FAX: 073-435-5201

連絡先：関西病虫害研究会事務局

050-3533-4624 (担当：藤本・大西)

詳 細：関西病虫害研究会 HP をご覧下さい。

##### (5) 第 56 回四国植物防疫研究協議会大会

日 時：平成 23 年 11 月 28 日 (月) ~29 日 (火)

場 所：三翠園

(〒 780-8663 高知県高知市鷹匠町 1-3-35)

TEL: 088-822-0131

##### (6) 第 83 回九州病害虫研究会春季発表会

日 時：平成 24 年 2 月 2 日 (木) 9:00~17:00

場 所：KKR ホテル熊本 (熊本市)

(〒 860-0001 熊本市千葉城街 3-31)

Tel: 096-355-0121

連絡先：九州病害虫研究会事務局

(〒 861-1192 熊本県合志市須屋 2421)

Tel&Fax: 096-242-7255

E-mail: kyubyochu@ml.affrc.go.jp

#### 【学会ニュース編集委員コーナー】

本会ニュースは身近な関連情報を気軽に交換することを趣旨として発行されております。会員の各種出版物のご紹介、書評、会員の動静、学会運営に対するご意見、会員の関連学会における受賞、プロジェクトの紹介などの情報をお寄せいただきたくお願いします。

投稿宛先：〒 114-0015 東京都北区中里 2-28-10

日本植物防疫協会ビル内

学会ニュース編集委員会

FAX：03-5980-0282 (学会事務局とともに移転しました)

または下記学会ニュース編集委員へ：

加来久敏, 畔上耕児, 濱本 宏, 植草秀敏, 宮田伸一

各委員宛

---

## 編集後記

学会ニュース第56号をお送りします。今回は学会ニュース編集時点で終了した部会の報告と関連学会及び関連国際会議の報告、病害虫研究会の案内のみのコンパクトな内容となりました。

例年であれば大会とそれに付随した研究会、談話会等で盛りだくさんの内容になるのですが、今年は大震災による大会の中止や研究会の延期で、大変寂しい内容となりました。早く、震災の影響から抜け出して、学会本来の活発な活動の復活を祈ってやみません。

本号では関連学会報告として「植物保護科学連合の設立と公開シンポジウムの開催」についての報告記事が掲載されていますが、とくに日本応用動物昆虫学会及び日本農業学会との連携は、これまでの三学会会長懇談会などの積み重ねの歴史もあり、また関連5学会とも技術士・農業部門に「植物保護」が新設された後、新設技術士の今後の育成と活躍の場面創出などで連携の実績があります。今後、昨今の「食の安全安心」、「環境保全型農業」、「トレーサビリティ」等、国民のニーズ・関心の機運にも沿っていることから、連携のさらなる強化が期待されます。

さて、延期となっていた大会関連の研究会も開催される運びとなり、そうこうするうちに来年の福岡での大会開催やそれに伴う第2回日韓合同セミナーの案内という時節になってきました。学会の連携とともに、学会の国際化も大きな課題です。来年度はいろいろな活動記事の報告で、学会ニュースも大幅増量となるように祈念しております。また、さらにルーティンの記事以外でも、皆さんの情報発信の場としての活発な投稿をお願いいたします。

(加来久敏)

---